

# 「アブラハムの信仰と疑い」

創世記 15 章 5~6 節  
ローマ人への手紙 4 章 1~3 節



「信仰の父」とも呼ばれているアブラハムは、旧約聖書の創世記 12 章から 25 章にかけて登場してきます。しかし、アブラハムよりも前に、「神とともに歩んだ」人物として、エノクやノアが登場しています。「信仰の父」は、何故、エノクやノアではなかったのでしょうか。アブラハムは、妻を妹と偽ったこと 2 回、奴隷の女性との間に子供をもうけたりと、とても信仰者のお手本となるような人ではなかったように思えますが、信仰者とはどのような人のことをいうのでしょうか。

## 1. キリスト者としてのアイデンティティ

・「認罪」→「救い」

・「悩み」→キリスト者

・「原罪」の 2 つの考え方

・「罪」とは、「人間を神から隔てるもの」、「神との関係を破壊するもの」

・「信仰義認」→その後のキリスト者

“こういうわけで、ちょうど一人の人によって罪が世界に入り、罪によって死が入り、こうして、すべての人が罪を犯したので、死がすべての人に広がったのと同様に—” ローマ 5:12

## 2. 疑いは信仰の敵か、それとも信仰の一部か

「疑い」とは、ある人の教え、勧告、さらに一般に真摯さにかかわる一種の懷疑である。ただ慎重であるにすぎない不信もあるが、本当の信頼は盲信ではない。本当の信頼はしばしば他人が言っていることを盲信しないことであり、疑うことによって、われわれはもっと良い判断を持つようになるのである。(アラン定義集)

「信仰という行為は、疑念との絶え間ない対話である。」(J.A.T.ロビンソン主教)

## 3. 成長し成熟するクリスチャンとは

“天の御国は、旅に出るにあたり、自分のしもべたちを呼んで財産を預ける人のようです。” マタイ 25:14

“さて、かなり時がたってから、しもべたちの主人が帰って来て彼らと清算をした。” マタイ 25:19

“イエスは酸いぶどう酒を受けると、「完了した」と言われた。そして、頭を垂れて霊をお渡しになった。”  
ヨハネ 19:30